〈2011年度　第３回定例研究会〉

キャンパス・ソーシャルワークとは何か？
～意義と課題～

講　演：平塚　良子（大分大学大学院教授）

日　時：2011年12月17日（土）

2011年度第３回の社会福祉研究所研究会では、岡本憲也学長の「カリキュラムにおける教育だけでなく総合的な教育を」という主旨の挨拶の後、大分大学の平塚良子先生のキャンパスソーシャルワーカーについての講演が行われました。以下、その概要をご報告いたします。

＊　＊　＊

１，なぜ大学にソーシャルワークが必要なのでしょうか。

学校を拠点に子どもと家族を支えていこうというソーシャルワークの動きが、大学にも広がりつつある時代になってきました。大学進学率が76.3％、７割以上が高等教育機関に進学するようになりましたが、休学率、卒業延期率は増加してきています。2010年度は全国で大学在学生は2,887,414人ですが、そのうちの39,714人、1.38％が休学し、卒業率も76.7％です（1996年度入学者以前は90％以上が卒業していたのですが）。不登校傾向の学生も増加しており、学生相談の件数も増えています。悩みを抱えながら相談しない学生も潜在的に増加しているため、既存の学生相談のモデルでは限界があります。卒業、進路変更、退学なども含めて、相談室だけでなく、全学的な取り組みを伴った新たな学生支援モデルが必要とされている所以です。

日本の大学は基本的に正課教育と研究が中心になっていることを文部科学省も指摘しています。正課外教育の見直しや人格教育の総合的援助の必要性が以前から提起されていました。そこで、正課外教育（課外教育、奨学援助、保健指導、職業指導等）の充実に、今日の問題の解決の可能性が見出されます。廣中レポート（2000年）でも、「豊かさモデル」が提起されました。修学状況の把握と適切な相談援助、一時的に学業を積極的に放棄できる修学システムの構築、柔軟な単位取得システム、豊かで快適な大学環境（教育システムの他、喫茶コーナー、たまり場、等）が提案されています。

学生相談のあり方も、捉え直しが迫られています。悩みがあっても相談しない学生、相談に来ても途中から来なくなる学生も増加し、自分で解決できるケースもありますが、そうでない場合も多く、休学や退学につながっていきます。学生相談の機能のある大学は９割以上にのぼり、カウンセ

ラーを導入しているところもありますが、専門家がいるのは２割程度です。学生相談の新たなとらえ直しとして、専門家の導入、来訪しやすい何でも相談窓口、不登校傾向の学生への対応などが挙げられます。

このような状況にある学生支援を３層モデルで考えますと、１、日常生活支援（学習指導、研究室運営、窓口業務等）、２、制度化された支援（クラス担任制、アドバイザー、チュートリアル）、３、専門的学生支援（学生相談、キャリア、学習支援、保健管理、学外連携）などが考えられます。

２，大分大学の取り組み：「不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援」

「アウトリーチ型」とは、本人が出てこない場合にこちらが出ていくことで、教室に出てこられる、出ていきたくなるようにしようという、総合的で確実な援助の形態です。大分大学では、アパートや家庭への訪問、時には家族にも来てもらうなど、きめ細かな対応を、窓口、ゼミの教員、その他の協力で行っています。場合によってはハローワークやリハビリ治療にも繋げていく方針です。

・「キャンパスなんでも相談」（週２日、５名のソーシャルワーカー）を、相談者の匿名も可で、他の部署とも連携して行っています。

・「ぴあＲＯＯＭ」という学生の集える空間も開設しています（週５日、３名のソーシャルワーカー）。潜在的ニーズを持ちながら来訪しづらい学生のもとへ出向く体制を整え、また、学生相談だけでなく、数学や物理の学習支援も行っています。教室に入れない、学食で食べられない学生のための、給湯設備や畳、こたつなどを備えたフリースペースも設置し、そこで学生の和もできています。

とにかく全学挙げての協力が必要で、窓口、授業、その他会うたびごとに声をかけることもあります。支援チームは、心理社会支援班、家族支援班、修学支援班、管理広報班があり、教員、ソーシャルワーカー、臨床心理士、学生支援課、職員などで構成されています。

ソーシャルワーカーは当初１名を雇用していましたが、学生との相性なども配慮し、現在は学生に近い年齢の方も合わせて３名の熟練したソーシャルワーカーを謝金形態で配置していますが、フル回転している状況です。ソーシャルワーカーの仕事には、以下のものがあります。

１、直接支援：本人・家族に、面談、電話・メール、声かけ、見守り、家庭訪問などを行う。

２、間接的支援：精神科医や臨床心理士との連絡・相談、教員や学内関係者・学外関係者との連絡・相談、支援チーム会議や「ぴあＲＯＯＭ」会議への参加。

ソーシャルワーカーの位置づけは、中立的立場で自由裁量度が高いものになっています（時には医師との意見の対立もありますが、尊重しあって解決しています）。個別の支援の仕組みで、個別性を尊重しながら、調整・改善、場合によっては創出によって、学生と学内外の諸環境との架け橋となっています。

3，取り組みの成果

大分大学では、2008年から2009年度の相談学生は120名で、学業面や対人関係で改善をみた学生は74名（61.4％）です。相談の継続率も以前の29.2％から48.6％に上昇しました。メール、手紙、電話、家族支援、家庭訪問などの「アウトリーチ型」支援によるフォローが可能になったためです。

重要な観点として、以下の事柄が挙げられます。個々の学生の歩調を尊重すること、学生が自分自身について立ち止まって考える「時間」を体験し意味づけていく内的な作業の機会をゆったりとした空間の中で持つこと、学生の抱える困難は決してマイナスではないことを確認すること（休学なども、必要なときにきちんと支えるステップとして考えること）などです。

大分大学では今後も安定した継続・運営を図っていく予定です。学外資源の開発と連携（学生の社会への軟着陸も含めて）も大切な要素です。

＊　＊　＊

質問も活発に行われ、充実した研究会となりました。

（研究会報告担当者：長友　敬一）